



いつのころか、大津の石場の船着場の沖で、溺れかけた若い修行僧を一人の娘が助けた。娘は船着場の近くの旅籠の一人娘で名をお光といった。修行僧はお光の懸命の介抱で意識を取り戻したが、不思議なことに船着場で風景を眺めていただけで、どうして水の中に落ちたのか全く覚えていなかった。

「この湖の底に住む龍神のせいでしょう」とお光は言った。そして、湖に伝わる悲しい物語を話してくれたのである。

いつのころか、石場の船着場の旅籠に美しい一人の娘がいた。父とふたり暮らしだったから、父を助けてよく働いた。娘に思いを寄せる若者は数限りなかったが、家業の手伝いに明け暮れて、振り向きもしなかった。

ある年のことである。旅の若僧が一人、この旅籠にわらじを脱いだ。

「わたしは東のでの長い旅を終え、比良の満月寺へ帰る途中です。しばらくやっかいにあずかりたい」

見ればほこりにまみれ、疲れた様子であったが、姿清らかな若僧であった。

その若僧を一目見るなり、娘はハッと胸をつかれた。その整った顔立ちや、静かな立ち振る舞いは、今まで出合った若者たちとどこか違っていた。

その夜から若僧は長旅の疲れが出たのかどっと寝込んだ。娘は夜も眠らず看病した。やがて若僧の病は良くなっていくにつれ、娘は若僧を慕うようになっていった。生まれて初めての思いであっただけに、娘の思いはひとしお強く燃え上がったが、思いを告げることなど出来るはずもなく、夜ともなれば若僧の語る他国の珍しい話に、娘は胸をときめかせ、目を輝かせて聞き入っているのだった。

ある夜、若僧は主人と娘に向かい

「おかげさまにて身体もようになりました。いよいよあすは比良へ戻ろうと思ひます」とあつく礼をいった。

その夜、娘は床についてもまんじりとも出来ず、心を決すると夜ふけて若僧の部屋へ忍び、ひたすら思いのたけを打ち明けた。すると若僧は

「自分は湖水のかなたにある堅田の満月寺に帰り次第、浮御堂へ籠って百日の間修行をせねばならない。それほどまでに慕う心がまことなら、この石場からたらい船に乗り、百夜続いて通うてみよ。みごと、百夜を通うた時には、わたしも還俗してそなたを妻に迎えよう」と言った。

「そ、それは誠にございますか」

「僧に二言はござりませぬ」

それを聞くと、娘は目は輝かせ、「通うてみせます。たとえどんな苦難があろうと、無事に通うてみせます」と、言った。

暫くして約束の夜から、三井寺の晩鐘を合図に石場に浮かべたたらい舟に乗りこんだ娘の姿が見られた。

唐崎・堅田の沖を経ると、比良山麓の満月寺の浮御堂の灯明が一条の光を投げつける。暗い湖上を照らす唯一のあかりであり、それだけが目印であった。この灯明を目当てに、来る夜も来る夜も、ひたすら暗夜の湖上をこぎ渡ったのである。そして、湖上から仏に仕える恋しい人の後ろ姿を拜んでは帰って行った。

若僧は、毎夜訪れる娘に驚いていた。

若僧にとって、百夜通うてみよと言うたのは、とても女の身で出来るはずはないと思ったからであった。そのうちあきらめるだろうとたかをくくっていたが、まさか今夜は来ぬだろうと思う夜も、ざばざばと娘のこぐ舟音を聞いては、しだいに恐れおののいていた。

そして、残りの一夜となった日のことである。

仏前に百か日の祈願をする若僧の心は乱れた。そんな若僧に先輩の僧が、「このところ、ぼんやりふさぎこんで勤めにも気が乗らぬ風だが、それではとても一人前の僧侶になれねぞ。青い顔をしておるが、なんぞ魔性の者にでも取りつかれたか」と、声をかけた。

約束の百夜があすで満ちると思うと、若僧はいても立ってもおられなかった。「そうだ。あの娘、ただの娘とは思えぬ。魔性の者かもしれない。でなくば、娘の身でなんで百夜も通えるものか」

そう思うと恐ろしくなった若僧の心に、あるひらめきが稲妻のように走った。

いよいよ百日目の夜のことである。ひたすら若僧への思いに取り付かれた娘は、見る影もなくやせ、目だけが強い光を帯びていたが、今夜で最後と思うと娘の心は喜びに震えた。娘のはやる心と反対にたらい舟の進みはのろかった。ようやく唐崎・堅田の沖を乗り越えたとき、雨雲がにわかになち込め、見る見る星影が消えていったが、娘は気づかなかった。暗い湖上に満月寺の灯明があかあかと見えた。ここまで来ればあと僅か、娘は安堵の吐息を漏らすと

「やっと、あの人に会える。あの人と話しも出来る」と呟いた。

その時一瞬、あたりが真っ暗闇になった。浮御堂の灯明が消えたのである。

「灯明が 灯明が」

娘は呻いた。湖はごうごうとほえたけり、稲妻が走った。さかまく波間に小さなたらい舟は見え隠れした。

娘は暗闇の湖上で、盲めっぽうこぎまくったが、押し寄せ、うずまく怒濤に翻弄され、あっという間に舟は転覆した。娘もまた、波にのまれ、暗い湖底深く沈んで行った - -。

お光は物語を語り終えると修行僧に言った。

「娘の父親は湖底に沈んだ娘を哀れんで、自分も湖に入り龍神となったのです。龍神は娘を裏切った若僧を憎んで、湖の底にお坊様を連れて行こうとしたのです」

それにしても、お光はどのようにして自分を助けてくれたのかと修行僧は思っ

た。お光は目が見えないのである。

「目が見えなくとも湖のことなら何でも分かるのです。水の色も空の色も、鳥達やさかな達が教えてくれるのです」

お光は他にも色々な話を修行僧に話して聞かせた。そして物語の娘のようにお光もまた、旅籠に訪れた旅の僧に心を寄せていった。

1カ月が経った。修行僧がお光に言った。

「私は叡山の修行僧です。おかげで身体もよくなりました。私は叡山に帰らなければいけない」

するとお光は見えぬ目で修行僧を見つめて悲しく言った。

「私は物語りの娘が羨ましい。私は目が見えないからお坊さまの顔も見ることが出来ないし、気持ちも伝えられないのです」

「そんなことはない。あなたは見えなくても他の娘に何一つ劣っていない。あなたに出来ないことはない。あなたは私を助けて看病してくれたではないか」

「それでは、私が同じように百夜の間たらい舟で湖を渡って満月寺に通うことが出来たら、私を妻にして下さいますか」

修行僧は驚いた。一瞬お光が語った物語の娘のことが思い出された。普通の娘でも夜の湖を渡ることなど出来ないのに、目の見えぬ娘に一人で湖を渡ることなど出来るはずがないではないか。だから、修行僧は物語の僧と同じことをお光に約束した。妻にすると……。

修行僧は叡山に帰り、暫くして満月寺の浮御堂に籠って百日の修行を始めた。するとその夜から満月寺を目指して漕ぎ渡ってくる一艘のたらい舟が現れたのである。

修行僧は慄いた。あれはお光ではない……と呟いた。あれは湖底に沈んだという龍神の娘だと思い込もうとした。龍神の娘なら約束を守る必要がないと。

百日目の夜が来た。そして、その夜も湖に嵐が吹いた。嵐の中で木の葉のように漂うタライ舟を修行僧は浮御堂から見つけた。

「龍神だ！。あれは龍神の娘だ！。お光ではない！」

そう叫ぶと、修行僧は狂ったように浮御堂の灯明を全て消した。湖は暗黒のふちに落ちた。すると、修行僧の耳に風の音に乗って湖のほうから女人の声が聞こえてきた。お光の声であった。

「お坊さま、あなたはあの時と同じようにまた灯明の明かりを消してしまいましたね。私はもうあなたに会いに行くことは出来ない。私は目が見えなくとも灯明の明かりだけは見えたのに。私はあなたに言われたように、百夜、たらい舟で湖を漕ぎ渡ったのに。あなたは私との約束を守らず灯明を消してしまった。あなたは罰を受けなくてはならない。生涯をかけて償うのです。栄達や名誉を望まず、生涯人々のために尽くすのです」

お光と娘を湖に沈めた嵐は、比良嵐と呼ばれる比良の東麓に吹き降ろされる局地風で、特に3月26日に行われる天台宗の行事「比良八講」の前後に吹くものを比良八講荒じまいと呼び、湖国に春を呼ぶ風とされている。(おわり)

2月13日 三田を歩く

三田はいい町ですね。好きになりました。



九鬼家住宅の吊り上げ式の大戸もいいし、心月院の和尚さん設計の手作り風の石庭もいいし、町並みに不調和な教会もいいし、有馬富士もいいし、現代アートみたいな白洲夫妻の墓標もいいし、子供の頃の町内の風景を思

い出させる屋敷町もいい。川本幸民先生もいいし、昔は海賊だった九鬼の殿さんもいいし、なにより明治の初めに絵に描いたような和洋折衷丸出しの家を建てた、三田藩の元家老の遊び心がなんともいいですね。

九鬼家住宅、冊子の説明では明治8年前後に建てられたとある。建てたのは三田藩の家老職を代々努めた九鬼隆範さん。この元家老、明治維新で世の中の基準が変わったとたんにさっそく西洋の家の絵が写真を手に入れて、それとそっくりの家を自分で設計して作ってしまった？ んですかね。何となく明治のおおらかさというか、明るさですね。「坂の上の雲」ですね。いいです。

そういえば今日見たものの中に「国宝」とか「重文」とか「世界遺産」とかいうようなご大層なものは一つもなかった。そのかわりに商売上手な和尚さんの心月院で見せられたものは、勝海舟の写真に、伊勢谷友介演じる白洲次郎のポスター、今評判の江姫のサイン。これではまるでお寺というより街角ミュージアム。不思議なお寺でした。新しもの好きで工夫好き、手作りが大好きで、例えていえば主婦のボランティアグループが手作りの小物やお菓子を並べて売っている、失礼ですが、三田の町はそんな感じがしたんですが、どうでしょう。

今回の冊子で参考資料で「NPO法人歴史文化財ネットワーク三田（歴文ネットさんだ）」というのが目につきましたが、これは11年前に発足した市民グループで、三田の歴史を紹介したり、文化財の管理・運営を目的としているそうです。会員数は48名、30歳代から80歳代までの男女で、今日見学した「旧九鬼家住宅」などの施設の管理も行っている。代表者は大阪から来られた女性の方で「三田を心のふるさとにしたい」と、三田の歴史に関わり始められたそうです。

この「歴文ネットさんだ」は、当初、市の文化財ボランティア養成講座受講者が立ち上げた市民グループ（発足時は「文化財ボランティアさんだ」）で、今日先頭に立って案内されていたポポアの西村さんは発足時のメンバーだったそうです。そういえば西村さんも元は宝塚から三田に来られた。前述のNPOの女性もそうですし、今日会った心月院の正龍和尚も越前の永平寺から来たそうですが、他所から来た人が三田の文化や歴史を大事にして、手作りで守っている。今日、三田の町をそんなことを感じながら歩いたんですが、でも僕が三田の町を好きになった一番の理由は、西村さんと話をしながら歩けたからかもしれません。

あと2行、何か書きたいけど、今日は10時から仲間由起江と壇れいの「美しい隣人」を見ないといけないし、それではこのへんで、さようなら。